

『わたしを愛するか』 ヨハネによる福音書 21 章 15～22 節 井上隆晶牧師

①【自分の弱さを認めるリーダーこそが必要であること】

ガリラヤ湖畔での朝食がすむと、イエス様の方から口を開いてペトロに言われました。「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか。」（15 節）ペトロ（岩という意味）というのはイエス様がつけたあだ名で、シモンが本名です。「本当のあなたに聞きます。あなたは、回りにいる弟子たち以上に、命を捨てても私を愛しますか？」と聞かれたのです。なぜこんなことを聞かれたのかというと、イエス様が十字架にかかる前に、ペトロは「みんながつまずいても、私はつまずきません。…一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」（マルコ 14：29～30）と言ったからです。しかしこの後、自分の身に危険を感じた時「そんな人は知らない」と三回嘘をつきイエス様を裏切ったのです。三回「そんな人は知らない」と言ったので、ここでも三回「私を愛しているか」とペトロに問われたのです。

それに対してペトロは「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存知です。」（15 節）と答えました。表現は違いますが、三度とも同じように答えています。これは、「はい、命を棄てられるほどの愛は自分にはありません。今度また試されたら再び逃げてしまうかもしれません。でも私は欠けのある愛で、あなたを愛していることは、あなたは御存じでしょう。」という意味です。神の愛と、私たち人間の愛は違います。人間の愛は、自分を愛してくれる人、自分の好きな人しか愛せません。自分が損をすると思ったら愛せなくなります。

ペトロは本当の自分を知ることが必要でした。人は失敗をしなければ、本当の自分を知ることができません。神様はあえてペトロに失敗をさせたのです。そうでなければ彼は上に立って兄弟を裁きまくり、群れは散ってしまったでしょう。心理学者ゴードン・オルポートは「人間の問題を扱う人はあいまいさを受容することが必要だ」といっています。上に立つ人はグレーでなければなりません。白黒をはっきりさせようとしたり、原因を追究しようと躍起になると心の病になりますし、人は離れていきます。キリストが復活して勝利したのに、神がなぜ私たちに弱さや罪を残されたのかというと、私たちを謙虚にさせるためです。もし私たちが完全になり、罪を犯さなくなったら、とんでもない傲慢な人間になるでしょう。雑草でさえ生えない土地は異常なのです。自分も失敗を繰り返す者だと知っている人は、他人の失敗を責めなくなります。自分も同じだと思うからです。イエス様が教えるリーダーとは、強いリーダーではなく、弱さを持つリーダー、傷を抱えたリーダーであるのです。口に筆をくわえて詩画集を描かれたクリスチャンの星野富弘さんはこんな詩を残しています。

- 「よろこびが集まったよりも、悲しみが集まった方が、しあわせに近いような気がする。
強いものが集まったよりも、弱い者が集まった方が、真実に近いような気がする。
しあわせが集ったよりも、ふしあわせが集った方が、愛に近いような気がする。」

●日本は経済的に豊かな国で、うつ病患者はそれほど世界的にも多くないのに、自殺者はトップクラスに入るそうです。それはコミュニティー（家族）が崩壊し、人々がばらばらに社会に放り出され孤立しているからたからだと言われている。秋田県は自殺者がトップだったのに、最近取り組みで減ってきたそうです。それは「自殺について語り合う」グループを作ったからです。そのグループには一つだけルールがあります。それは自慢話しはしない。他人の失敗は責めない。神様を絶対的に信頼することです。このようなグループ（家族）なら、安心して失敗でき、弱さを出せるのです。そして弱さを見せても受け入れられた人は自死をしないのです。

天国に行ったら罪人だらけでしょう。ダビデも、ソロモンも、アブラハムもペトロも神様に赦してもらった以外、どうにもならなかった人たちです。彼らが私たちを温かく迎えてくれるでしょう。

②【欠けのある愛で、兄弟姉妹と寄り添い続けなさい】

イエス様は続けてペトロに対して「私の小羊を飼いなさい（feed）」（15 節）「私の羊の世話をしなさい（Take care）」（16 節）「私の羊を飼いなさい（feed）」（17 節）と 3 回言われました。羊とか小羊というのは信者さんのことです。「私の」と書かれていますから、信者さんはキリストのものです。「飼う・世話をする」というのは英語では「feed」「Take care」です。「feed」は食べ物を与える、養い、育てるという意味です。「Take care」は世話をする、めんどろをみるという意味です。具体的には「神父・牧師」になれといわれたのです。信者さんに神のことを教え、聖餐を配り、祈り、さまざまなめんどろを見なさいということです。牧師というのはここから来ています。羊を牧する人という意味です。世話をすることを「牧会、司牧」と言います。私たち牧師はキリストのものを預けられたのです。欠けのある愛でいいから、キリストの羊の世話をしなさいと言われたのです。

私は 5 年間の信者生活の後に牧師になりました。牧師になると意識を変えなければなりません。群れの模範にならなくてはならない、牧師というのは教会の顔なんだ、牧師が不機嫌なら、新しく来た人は教会はそういう処だと思えます。牧師が冷たければ、ああキリスト教ってそういうものなんだと思われます。キリストを背負っているのです。つまりかせてはいけないと思いました。どんなにし

んどくても休んではいけない、逃げてはいけない、どんな人も受け入れ、向き合わなければいけない、腹が立っても口に出してはいけない、と思って必死にやってきました。でも出来ませんでした。自分は愛のない者であること、自分は人を愛せず、救えない者であることを教えられました。ヘンリ・ナウエンの本にこのようなことが書いてありました。

●ケア (care) するという言葉の持つ意味を考えてみよう。ケア (care) とは、語源はゴート語で「心を痛めること、悲しむこと」という意味のカラから来ている。ケアの本当の意味は、心を痛めること、悲しみを経験すること、共に泣くことである。強い者が弱い者に、力のある者が力の無い者に、持つ者が持たない者にとる態度ではない。実際、誰かの痛みを何とかしようとする前に、その痛みを共にするようにと招かれたら、私たちは抵抗を感じるだろう。私たちは、痛ましい現実から逃げようとしたり、なるべく早くその状態を変えようとする。それは私たちが辛いからである。しかし、愛の配慮 (ケア) なしに救おうとすると、私たちは支配する者、コントロールする者となり、真の共同体は造られることはない。

世話をするとはい、人に寄り添い、治せなくても、癒せなくても共に苦しみを分け合い、共に負いあい、共に痛みを感じ、共に祈り、共に泣くことなのです。この世で答えの出せるものは少ないのです。無理をして答えを出さなくてもいい、解決しようと思わなくてもいいのです。答えは来世で貰えるでしょう。

藤木正三牧師はこんなことを書いています。

●「時には、柔和に思いやり深く、そして忍耐強く人と接することもできますが、誰に対してもそうかと問われると自信はありません。やはり相手によりけりで、何時でも誰に対してもというわけにはゆきません。相手を選ばず、その反応に影響されず、全面的に受け入れて寄り添えるとはとても思えません。もしそのできる人にあつたら、人間以上のものを感じるでしょう。神性 (divinity) とは、高貴性 (noble) とか、清浄性 (pure) とかではなくて、この「寄り添い性」(draw close) ではないでしょうか。人の世に神が住まわれる所があるならば、寄り添う人の心の中にです。」

人と寄り添う人は、この世で神のイメージを現わすのです。神の名前はインマヌエル、「神はわれわれと共におられる」だからです。実際、キリストは共におられます。何があっても、どんなに失敗してもキリストはあなたと共にいてくださいます。そのキリストの永遠の愛を喜ぼうではありませんか。好きな人が共にいるならたとえ問題があつたとしても、いつも、どこでも天国なのです。